

『アジア・クォーター』
1972-1月(第4巻)

第3回箱根シンポジウム

米中関係の新段階と日本



アジア調査会会長 荒井精一のあいさつ

社団法人アジア調査会は、ニクソン訪中と中国の国連加盟必至という情勢を背景として、1971年9月26日から28日まで、箱根・小涌園ホテルで中国研究委員会を中心に第3回箱根シンポジウムを催した。

このシンポジウムは、ニクソン訪中に伴う米中関係の新段階に対応すべき日本の外交政策のあり方を検討するため、文革以降の中国情勢、ニクソン訪中の背景、その国際的影響および日本にとっての意味などを、それぞれのセッションで討論、最後に一応の結論をまとめた。なお、このなかで表明された見解は、討論参加者各自の意見である。

- 出席者
- 石川忠雄 慶大教授
 - 宇佐美滋 毎日新聞外信部
 - 江頭教馬 同 東京副社長
 - 大川次郎 国際情勢研究会参与
 - 岡部達味 都立大助教授
 - 神谷不二 慶大教授
 - 佐伯喜一 野村総合研究所長
 - 徳田教之 アジア経済研究所主任調査研究員
 - 永井陽之助 東京工大教授
 - 中嶋嶺雄 東京外大助教授
 - 前田寿夫 防衛研究所主任研究員
 - 村松 暎 慶大教授
 - 矢野 暢 広島大助教授
 - 蟻山道雄 上智大教授

東畑精一 アジア調査会会長
太田一郎 同 副会長

(五十音順)

開会のあいさつ

研究者に期待する

アジア調査会会長 東畑精一

遠路お忙しい中をご参集いただき、シンポジウムを催すことのできるのには、アジア調査会として大変ありがたく思います。昨年のシンポジウムから、一年経ちましたが、その間に中国問題には、非常に大きな変化がございました。なにか今年は、昨年よりも一層切迫感といえますか、現実感といえますか、それが非常に強くなったと思います。それだけに、過去一年間の研究の成果に基づき皆さんの議論を拝聴すること、がでることを期待しております。

私は最近中国問題について非常に痛感していることがありま... 問題は、非常に大きな変化がございました。なにか今年は、昨年よりも一層切迫感といえますか、現実感といえますか、それが非常に強くなったと思います。それだけに、過去一年間の研究の成果に基づき皆さんの議論を拝聴すること、がでることを期待しております。

い。それにこちらにプリンシプルがない。こういうことになる。どうも満足できない。

結局、いまのところ頼りになりうるのは研究者だけなんです。外交といいますが、国際問題について、これら研究者はまだ試験されていないから...。しかし、何といっても、米国のことも中国のことも知らなければならぬ。しかも、世界はそれだけではない、アジアもありますし、ヨーロッパもある。こういうことについての正確な資料を背景としなければ世界の問題を外交場裡において論ずることはできない。私はこう思っておりますので。頼りになるのは、実は研究者じゃなくかと考えております。ひとつ、皆さんに現実に関心があるかどうかなんかという責任のある答えを出していただければ非常にありがたいわけです。

私はそういう意味で、皆さんに期待するわけですが、このシンポジウムを意義あらしめるため、どうか、活発なご議論を展開していただきたいと思えます。非常に集約的な会議が五回にわたるので、お疲れになるかもしれませんが、ご辛抱願って、